大会終へて入洛[[1]](#footnote-1)

**京こそ心の故郷　大東亞文學者交々語る**

（京都はつ）を學で結ぶわれらの使、大東学者朝表香山光郎先生ら三十人の一行は十二日九時五十三分けう都えき着[、]良にて入らく[、]今をりのにしきつゞるのにあこがれの胸をどらせつつ[[2]](#footnote-2)[、]學國事務局長久米正雄氏以下の家や第三長小泉市郎氏のそひでホームに降り立つた。

　えきにはけう家をへうし楠田敏郎、木村二、高はじめ吉所長、中村市長のほか[、]先んじて前入らくの國へうバイコフ氏夫さいと令も

をみせる[。]かくて市觀光課長の案内でえき後から市供のバス二に分乗[、]まづけう都御所にり敬虔な面持ちで内を、一千百年の皇のむかしをしのんだ[。]それより一行はいつたん都ホテルに入り行のつかれをいやす暇もなくがひ思ひに二城の、平安神宮、西本願寺を參、またかんの參、美しいけうのを見に日をり、錦繍のけうに一のをむすんだ[。]こうていの最終をけうで送った人たちへとうは[[3]](#footnote-3)いかなるをへたか[、]宿舎に歸つてかたる感想を聞いて見よう。

　香山光郎氏

東化をしかい化をする日本化のとなつた日の都京都へのあこがれは畢の願ひであつたのだが[、]いまそのをたされることが出來た。との總てが日本化のとしてやかなれとなり今東化の□を□びかい化を抱ようしてゐる[。]わが榮のは日本化を基調とした新化のにあるが[、]そのために京の一木一草にも大の□心をもつてひとみをこらしいと憧憬をもたねばならない。

1. 『東亞新聞』【朝鮮版】昭和17年11月15日付 [↑](#footnote-ref-1)
2. 京都駅着[の]奈良電にて入洛、今[が]盛りの錦綴る京の秋にあこがれの胸躍らせつつ、 [↑](#footnote-ref-2)
3. 行程の最終を京で送った文人たちへ古都は～ [↑](#footnote-ref-3)